

No. 340【2019年1月18日配信】

築港工事の立役者 浦島山の物語 (担当:鈴木)

こんにちは、嘱託員の鈴木です。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

さて、歴史資料室では新しい展示「連絡船を知らない君へ～青函連絡船 終航 30 年～」を始めました。今回は、若い世代に連絡船のことを知っていただくと同時に、ご存知のかたにもそれを伝えていってほしいと考えて企画しました。

8 階パネル展示では、市内の小学 5 年生「さゆり」とその父「たかし」(40 代)、過去からやってきた連絡船の航海士、かつぎ屋のおばちゃんらが案内人となり、連絡船の歴史をご紹介します。

また、7 階エントランスでは青森港の変遷と、青函トンネル開通記念博覧会の函館会場に関する新収蔵資料を展示しています。

関連図書や DVD もご紹介していますので、ぜひお越しください。

ところで、この青森港の変遷について調べていたとき、ある新聞記事が目にとまりました。

昭和 11 年(1936)4 月 2 日付 1 日夕刊『東奥日報』の連載コラム「青森・春の風物詩」の「青森築港第二期拡張工事」という記事です。この中に「築港工事の立役者 浦島山の物語」という言葉が出てきます。これはどういうことでしょうか？

明治期、青森港には大型船に対応できる近代的な港湾設備がなく、乗客も貨物も沖に停泊した船まで小船で移動しなければなりませんでした。そのため、明治 20 年代中頃に青森港の修築運動が起こり、大正 4 年(1915)にようやく第一期修築工事が、さらに昭和 7 年からは 10 年計画で第二期修築工事が始まりました。

この第二期修築工事では、その頃あった東防波堤以东の埋立て(現在の中央埠頭付近)と物揚場の築造、防波堤の延伸などの整備が行なわれました。

実は、この工事に際し、当時の野内村浦島から割石を採取して海上運送し、港の埋立てに利用したのです。

浦島山とは、野内と久栗坂の真ん中くらいに位置する海沿いの小山をいうようです。記事には「昔、昔あったとさ 浦島山があったとさ 築港工事の碎石を削って削って身を喰はれ とうとう半分なくなった 築港工事の立役者 浦島山の物語 昔話に語られる時代もやがてくるでしょう」とあり、「工事が完成する頃には半分位なくなるかも知れぬ」と書いています。さすがに山が半分になることはなかったようですが、工事前後の地形図を見ると海側の斜面が削られているのがわかります。



第二期修築工事前の浦島山附近
(大正元年測図 二万五千分の一地形図「浅虫」)



第二期修築工事後の浦島山附近
(昭和 14 年修正測図 二万五千分の一地形図「浅虫」)

その後、この第二期修築工事は国の財政的な問題で工期が延び、また戦争による物価の高騰もあって工事内容の一部を残し打ち切られました。

戦後になると、青森港にはもっと大型の船が接岸できる岸壁が造られ、さらに油川・沖館・浅虫地区と港湾区域は拡大されていきました。